ＬＤ（学習障害）ー研究と実践ー
第９巻第２号　2001年７月発行

# 福井はぐくみ療育教室を中心とした地域療育ネットワーク作り

平　谷　美智夫

J. JPN. Acad. Learn. Disabilit., 2001, 9(2), 19-24.

実践報告2

# 福井はぐくみ療育教室を中心とした地域療育ネットワーク作り*

平　谷　美智夫

**key words:** Fukui Hagukumi Ryoiku Kyoshitsu, LD, ADHD, high functioning pervasive developmental disorder, Asperger's disease

福井県小児療育センター（以下：療育センター）は「教育・福祉・医療の連携」を基本理念として，既存の肢体不自由児施設を母体に，特殊教育センターや児童相談所と連携した先駆的な試みとして昭和58年，県立病院に併設された．センター小児科医の果たす役割は，①生物学的な視点に立った診断・治療，②教育や福祉の関係者に正確な医学情報を提供して療育の質を上げること，③情報交換を通して障害児・者を支えるネットワークを作ることである．

このような視点から，筆者は知的障害児・者の健康管理や注意欠陥多動性障害（ADHD），自閉症を中核とする高機能広汎性発達障害（以下：高機能PDD），学習障害（LD），運動能力障害（不器用な子ども）などの軽度発達障害児の発達支援に力を注いできた．

ここでは，過去10年間の筆者の外来を中心とした保護者・学校・保育所・特殊教育センター・福井大学教育学部（現：教育地域科学部）と連携した福井はぐくみ療育教室（筆者が主宰する発達障害児のための療育支援の組織）の歩みを紹介する．

*Michio Hiratani: A Network System to Support Children with LD, ADHD, High Functioning PDD and Other Developmental Disorder by Fukui Hagukumi Ryoiku Kyoshitsu.

福井県小児療育センター小児科（現・平谷こども発達クリニック）．

## 1　医療・教育・福祉に軽んぜられてきた軽度発達障害

人口1,000人あたり２人弱の脳性麻痺を中心とする肢体不自由児に比べて，LD，ADHD，高機能PDD，境界線級知能を含めた軽度発達障害は子ども人口の20%近くに達するが，これまで医療・教育・福祉のすべての分野で放置されてきたと言っても過言ではない．12年前に筆者が当センターに赴任した頃，軽度発達障害児にサービスを提供することはほとんど不可能であった．

センターで発達障害に関わるわずかの職員は難聴幼児通園施設（ひばり園）に措置された児童の対応に大半の時間を費やし，措置されていない軽度発達障害児への最小限度の療育援助すら不可能であった．公教育においても，特殊教育はわずか１%強の児童を対象としており，通常学級に在籍する軽度発達障害児はほとんど放置されていた．福井はぐくみ療育教室の歩みは，公的な受け皿のない軽度発達障害児童を生涯に渡って支えるボランティア的な組織作りそのものである．

## 2　福井はぐくみ療育教室

はぐくみ療育教室は，療育センターに通うPDD，ADHD，LD，不器用児，境界線級知

**表１　福井はぐくみ療育教室の活動内容**

| 事業名 | 対象者 | 活動内容・スタッフ |
|---|---|---|
| スポーツ・遊びの教室<br>１．ももぐみ<br>２．わいわいぐみ | ADHD・高機能を含むPDD・LD・Clumsy<br>就学前<br>小学生 | 第１・３土曜日の午後活動．ももぐみ10名，わいわいぐみ20名，おひさまぐみ10名．総数40名．スタッフはOT・ST・教員・幼稚園教諭・スポーツインストラクター・大学教官・学生総数40名． |
| ３．おひさまぐみ | 自閉症児<br>（知的障害合併者） | 児童と1対１のスタッフの確保につとめ，TEACCHを取り入れた自閉症療育を目指している．野外も活用． |
| 学習塾 | 小・中・高校生<br>ADHD・PDD・LD<br>その他 | 約40名の児童が週１～３回，教科指導を受ける．スタッフは，退職教師を核に現職教員・学生・教育学部卒業生・主婦で総数約15名．きめ細かな個別指導が必要なため生徒５～６人に３人の先生を原則．本部で開催． |
| 総合学習クラブ | 思春期（中・高校生）の高機能PDDと少数のADHDとLD | 社会性や生きる力をつけるための教室．週１回のホームルーム的な活動と教科学習，月１回の自主的なエベント開催．生徒約10名に４人のスタッフ．本部で開催． |
| サマースクール | 知的障害を合併する自閉症児童 | 約20名の児童が参加し週２回（計８回）福井大学付属養護学校の体育館とプールを使用． |
| 嶺南支部<br>スポーツ・遊びの教室 | | 敦賀市・美浜町を中心にADHD・自閉症・知的障害児童のスポーツ・遊びの教室を養護学校を拠点に開催． |
| 幼児教室<br>（TEACCH教室） | 自閉症児童（就学前～小学生） | 第2はぐくみ教室（構造化された教室）で，TEACCHを十分に取り入れた幼児教室を平成12年７月から開催． |
| 疾患別の会<br>１．アスペの会 | 高機能PDD（高機能自閉症・アスペルガー障害）<br>就学前～社会人 | 幼児期はＴＥＡＣＣＨを中心とした療育指導，学童期はTEACCHに加え対人関係・社会性を身につける小集団指導，思春期からは社会性の指導に加え，職業選択の活動を保護者と療育関係者の協力で行う．2000年６月から正式発足． |
| ２．ADHDの会（準備会） | ADHD児童 | 療育センターのADHD外来の機能を補う活動を1999年春から開始．正式な会の発足は2000年秋の予定． |
| 療育相談部門 | | 児童を多角的に理解し，発達を援助するためには学校（保育所），医療機関，保護者の連携が欠かせない．はぐくみ療育教室で療育支援を行っている児童について，保護者への助言や学校との連絡などにも力を入れている． |
| 研修部門 | | 啓蒙的な講演会，保護者対象の勉強会，スタッフの研修会，専門的な研究会など． |

福井県小児療育センターに通う注意欠陥多動性障害（ADHD），広汎性発達障害（高機能型自閉症を含む），学習障害（LD），発達性協調運動障害（Clumsy），境界線級知能などのための平成５年にスタートした「不器用な子どものためのスポーツ教室」と平成９年に開講した「学習塾」を平成11年４月から「福井はぐくみ療育教室」と改名し，すべての発達障害児を対象とした療育機関へと発展してきました．この教室で生き生きと楽しそうに活動する子どもたちの姿は，どの子も友達と遊びたい，新しいことを覚えたいなど真摯に生きていくことを強く感じます．子どもたちのこんな思いと，保護者の願い，スタッフの温かい支援で，この教室は育ってきました．現在は，篤志家から提供された福井駅近くの民家を本部として，さまざまな療育活動に取り組んでいます．子どもたちに社会性などを養成することのできる小集団活動の場を提供すると同時に，豊富なスタッフや学生アシスタントによるきめ細かな支援を提供し，医療機関はもとより学校との連携をはかっています．（はぐくみ療育教室パンフレットより）

福井はぐくみ療育教室 本部：〒910-0859 福井市日の出２丁目14－23
TEL（0776）27-0054　FAX（0776）27-0050

能，軽度知的障害など軽度発達障害の子どもたちの発達を援助するボランティア活動の中から生まれた教室である．平成５年にスタートした「不器用な子どものためのスポーツ教室」と平成９年に開講した「学習塾」を合併して，平成11年に「福井はぐくみ療育教室」が発足した．現在，福井駅東口に篤志家から提供された民家を本部として，事業を展開している（表１）．また，やはり篤志家から提供された国道沿いの60平米の事務所を，TEACCHを基本とした自閉症の総合的な療育教室として，平成12年７月から幼児教室が開設された．また敦賀市を中心に嶺南地区にもスポーツ教室が開設され，我々の活動は全県的に発展しつつある．

## 3　福井はぐくみ療育教室の歩み

### 1）　福井LD研究会の発足

センターに赴任した12年前，筆者は軽度発達障害，特にMBD（微細脳機能障害）と呼ばれていた子どもたちの療育が21世紀の障害児療育の重要な分野になるであろうと予想した．そこで，療育センター，特殊教育センター，福井大学教育学部の有志と勉強会を始め，そのころからMBDにかわって注目されつつあったLDの概念をふまえてグループを「福井LD研究会」と命名した．福井LD研究会の主な活動は療育センターと連携した①ケース会議，②療育キャンプ，③ADHD研究会，④不器用な子どものためのスポーツ教室などであった．

#### (1)　ケース会議

認知心理学の立場から軽度発達障害児を多角的に診断し治療教育の方針を考える場である．伊豆逓信病院のLDドックを参考に外来児童に実施可能なバッテリーを試行錯誤して作り上げた．①問診と診察，②多動評定，③行動・教育評定（Pupil Rating Scale），④知能・発達検査，⑤担任教師・保母による自由記載形式の認知・行動面のレポート，により構成されるバッテリー完成後，保護者，担任を含む関係者のケース検討会を開催した．

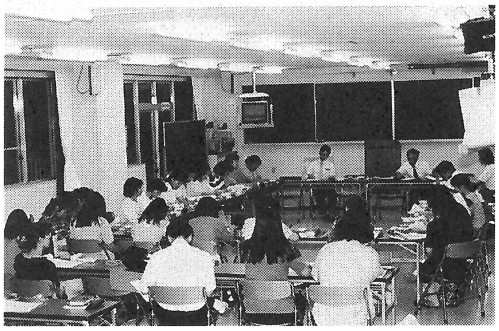

**写真１　ケース会議の風景**

小学校３年生ADHD児童のケース会議．卒園した保育所の園長以下の保母，児童相談所時代から援助してきた心理士，現担任教師および担任を支える同じ学校の特殊学級担任など，乳幼児期から学童期まで関わった関係者が参加．

ケースによっては，小学生であっても保育園時代の保母も参加したこともある（写真１）．これは子どもの発達を長い目で，深く理解する貴重な機会となった．

ケース会議は，その大半の時間を子どもの行動特徴の理解と診断のために費やされたが理解が深まるにつれてむしろ療育の実践に重点が移り，平成９年のセンター職員の定期異動を機会に中止されるまで約250回開催された．ケース会議は，当時まだ理解されにくかったLDとその周辺の理解と県下の障害児教育・保育のネットワーク作りにつながった．

#### (2)　治療教育の実践活動

①　不器用な子どものためのスポーツ遊びの教室（写真２）

対象児童は運動が苦手で友達とうまく遊べない子どもが多い．彼らに，スポーツを楽しむ場を，保護者には集いの場を提供する目的で，平成５年６月から隔週土曜日の午後開催してきた．参加児童は，ADHD，PDD（当初は高機能PDDが主，現在は知的障害を伴う自閉症児童も多数参加），軽度知的障害，運動能力障害（不器用児），それに狭義のLD

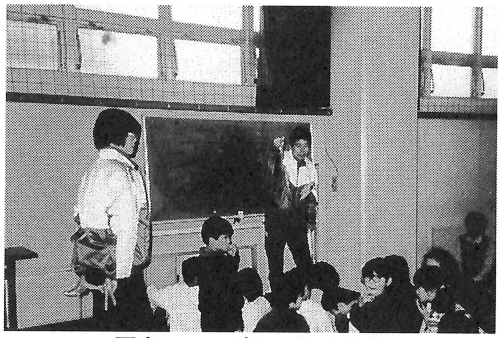

写真2　スポーツ教室風景

写真3　学習塾風景1

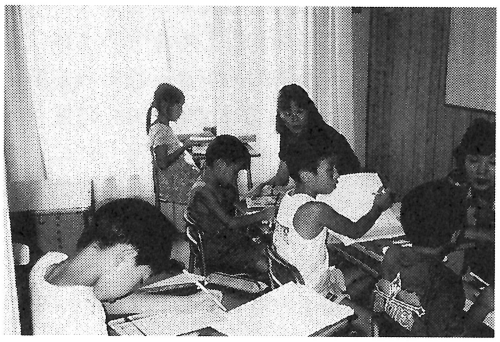

写真4　学習塾風景2

児である．平成11年秋から嶺南教育センターの堅田先生を中心に敦賀市を中心として嶺南スポーツ教室も開催された．多くの子どもが土曜日を楽しみに待っており，学校や地域では十分参加できない集団活動の場となるだけではなく，社会性や対人関係の発達に予想以上の成果をあげてきた．

② 学習塾の開催

通常学級に在籍し学業に困難を抱える軽度発達障害児を対象に，平成9年に篤志家から提供された福井駅近くの家屋で学習塾を開いた．試行錯誤の結果，5～6人の児童に3人の先生を一単位とする小集団での個別指導を原則としている．多動や対人関係に問題のある高機能PDD など，他の塾なら断られるような生徒でも継続可能で，集団の規模が適切であるからか，子どもたちのあいだに仲間意識が芽生え，社会性や対人関係を育むよい機会となるなど予想外の効果に驚いている．子どもの所属する学校長から感謝の電話をいただくことすらあり，徐々に地域に根をおろしつつある．

### 2） ADHD・PDD・LDなどすべての発達障害を対象とした教室への発展

#### (1) ADHDの研究と療育（ADHDの会の発足の動き）

センター受診児童に中枢刺激剤（Methylphenidate；リタリン）が奏功するADHDが多かったので，ADHDへの対応に力を注ぐようになったのは自然な流れであった．薬効を多角的な検査・評定バッテリーから評価し，脳機能からみたADHDの病態像の究明と教育・指導方法の指針について，医学・心理学・教育学の各分野から検討してきた．ここ数年ADHDへの関心は高く，増加する患者に外来での個別指導では応じきれなくなってきたこともあり，講演会や学習会などを頻繁に開催する過程でADHDの会の準備もほぼ整った．

#### (2) アスペの会発足

ADHDやLDを疑われて受診する子どもたちのなかに，PDDの診断基準を満たしながら，知的水準が正常である高機能型自閉症やアスペルガー障害などの高機能PDDあるいは自閉症スペクトルと呼ばれる子どもが目立つようになった．彼らは対人関係や社会性に

問題がありながらも，学業成績は時には優秀でさえあるので，発達障害の知識のない担任は気にはなりながらも，自閉症などとは夢にも考えず，せいぜいLDではないかと思う程度で，PDDとしての具体的な指導のないまま思春期に挫折することが多い．

このような児童とその保護者・関係者により平成12年５月「アスペの会」を発足した．会員は幼児から成人に及び，生涯に渡って彼らを援助する組織に育ちつつある．

**(3)　LD親の会（たんぽぽの会）との関係**

スポーツ教室も学習塾も，当初はLDとその周辺の児童を支援する組織という理念に基づいていたので，福井LD親の会の名称である「たんぽぽ」を使用してきた．ところが，参加児童はADHD，高機能PDD，軽度精神遅滞，境界線級知能，脳性麻痺などLDとは言えない発達障害が大半を占めるのに，大多数の者がそのままLD親の会に入会し，ただでさえあいまいなLDの概念がさらにあいまいになるということが続いた．

療育の視点からは，LDの概念のあいまいさがPDDやADHDの正しい理解を妨げているという筆者の考えから，平成11年４月，それまで使用してきた福井LD親の会の「たんぽぽ」という名前を脱ぎ捨て「福井はぐくみ療育教室」と改名した．軽度発達障害を主要な対象としながらも，すべての発達障害児を対象とする療育機関への脱皮である．LDという殻を破ったため活動の自由度が増し，福井駅近くの民家（本部）と，第２はぐくみ療育教室を拠点として，徐々に体制が整い，表１のような事業が可能となった．

**(4)　LD・高機能PDD・ADHDの鑑別診断を明確にした上で，LD親の会・アスペの会・ADHDの会を「はぐくみ」クラブのような会に結集する**（図１）

３つの疾病は重なりがあり明確には区別できない場合があり，しかもLDは診断名ではなく教育用語であるという理屈に合わない説明を根拠として，これら３つをLDと呼ぶ関係者がいる．しかしPDDの児童には，保護者にできるだけ早く診断名を告げて，生涯にわたる療育に必要な心構えと知識，それに見とおしを与えるべきである．ADHDにおいても同じことが言える．正確な診断は一般に考えられているより重要である．

LDについてはその定義があいまいにされてきたために，学業成績が優秀な児童ですらLDと呼ばれるという矛盾が生じ，筆者の周辺では，LDの中核症状である読み・書き・計算障害の指導や検討を無視したままで，ADHDや高機能PDD児の，社会性や集団活動への指導をLD指導と勘違いしている関係者すらいるような状況である．

組織としては，これまで「LD親の会」が果たしてきた役割を「はぐくみ」クラブ（仮称）が果たし，それぞれの会が独自の課題を果たしその課題が重なるときはお互いに協力し合う，このような関係が望ましいと考えている．

はぐくみ療育教室はスタッフが約50名，参加児童150名と大きく成長した．この８月にははじめての試みとして全員が参加する第１回「はぐくみ」祭りを開催した．幼児から高校生までのADHD，PDD，LDなどのさまざまな発達障害の児童が，中学生や高校生の会員がスタッフとともに数カ月かけて準備したプログラムに従い，楽しい半日を過ごした．センター外来と子どもたちを生涯に渡ってつなぐ「福井はぐくみ療育教室」は，彼らが成人になった時，さらに大きい役割を果たすことを確信するこの頃である．

〈はぐくみ療育教室の主なスタッフ〉

三橋美典，熊谷高幸（福井大学教授），清水聡（福井県立大学助教授），高野幸嗣，小八木隆，清水信子（前特殊教育センター），滝川国芳（現特殊教育センター），堅田久美子（県嶺南教育事務所），木本勇，谷口さかゑ，伊藤徹夫（元小学校長），田埜邦子（元教員），吉川郁子（北部保